

ロシア文学史

川端香男里 著



岩波全書



ロシア文学史

川端香男里著



岩波全書 341

川端香男里

1933年東京に生れる

1956年東京大学教養学部教養学科卒業

ロシア文学専攻

現在 東京大学文学部教授

著書 『薔薇と十字架—ロシア文学の世界』青
土社、『ユートピアの幻想』潮出版社、『トル
ストイ』講談社、『ロシア文学史』(編著)東京
大学出版会

訳書 R. ヒングリー『19世紀ロシアの作家と
社会』平凡社(中公文庫), M. パフチーン『フ
ランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンス
の民衆文化』せりか書房, A. ベールイ『ペ
テルブルグ』講談社

ロシア文学史

岩波全書 341

1986年9月12日 第1刷発行 ©

定価 2200 円

著 者 かわ ばた か お り
川 端 香 男 里

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-020893-4

第二節	ゴーゴリの時代	一四〇
第六章	リアリズム	一七七
第一節	リアリズムの背景	一八〇
第二節	リアリズムとその時代	一九〇
第三節	ロシア的ロマンの誕生——「貴族の巢」の文学	二〇五
第四節	ドストエフスキイと一八二〇年世代	二二六
第五節	トルストイと反ロマン主義世代	二六〇
第六節	雑階級人作家たち	二七九
第七節	チェーホフの時代——リアリズムの黄昏	二八六
終章	二十世紀の展望	二九五
マルジナリア		三〇七
索引		

序 論

ドストエフスキイの嘆き　ドストエフスキイは一八六二年夏にはじめて西欧に旅行し、その時の印象をもとにして『冬に記す夏の印象』(夏象冬記)という激越な西欧批判の書を書いた。ギリシア正教の信仰に人類救済の使命を認めるといふ点でドストエフスキイはスラヴ主義に近く、一般には一貫した反西欧主義者と考えられている。しかしドストエフスキイは、メレシコフスキイがいちはやく指摘したように(『トルストイとドストエフスキイ』一九〇一—二)、プーシキン以後のロシア作家の中で、「ロシア人であることが高度にヨーロッパ人であり世界人である」ことを最もよく身をもって示した作家であると言っている。熱烈な愛国者であった彼は、ロシア人こそ全世界に共鳴する能力、他国を理解する力をもつ国民であると信じ、ロシア人のそのような「全人類性」、全世界性を体現している作家としてプーシキンを賞揚したのである。

ドストエフスキイ自身も、自分たちを育ててくれたのはヨーロッパである、ヨーロッパは第二の祖国であつて、真のロシア人とはヨーロッパ人なのだ、ということを繰り返しのべている。ロシア人は常にヨーロッパ文学のよき理解者であつたと彼は言う。しかしロシアがヨーロッパで理解されるか、ロシア文学がヨーロッパで読まれるかということに関しては、彼はまったく

懷疑的であつた。「ああ悲しいかな……ヨーロッパではまだ長いことわが国の作家は読まれな
いだらう。読むようになってもまだ長いこと理解することも評価することもできないだらう。

そもそも彼らには評価する力がまったくないのだ。」『作家の日記』一八七七年七月・八月第二章の
3)

ロシア文学の評価

一八八一年にドストエフスキイは亡くなるが、そのころヨーロッパでは
ロシア文学への関心が急速に高まっていたのである。西欧に住み、西欧の作家思想家に多くの
知己を持っていたゲルツェンや「ロシア文学の大使」トゥルゲーネフたちによってロシア文学
紹介の努力は積み重ねられていたのであるが、一八八〇年代のロシア文学ブームの口火を切っ
たのはペテルブルグのフランス大使館の書記官であつたメルキオル・ド・ヴォギユエであつた。
新興ドイツの脅威がロシア、フランス両国をいわゆる露仏同盟へと向わせるという時代背景も、
フランスにおけるロシアへの関心を高めることに貢献した。フランスの各大学に相次いで露文
学の講座が設けられ、ロシアに関する研究書が次々と刊行された。

雑誌『両世界評論』によるヴォギユエのロシア文学紹介の仕事がまとめられて、一八八六年
に『ロシア小説』として刊行されるや、フランスだけではなく他のヨーロッパ諸国でも関心を
呼んだ。翌年にはマシュー・アーノルドのトルストイ論が書かれ、英語圏でもロシア文学書の
翻訳点数は一八八六年にはその前年の約四倍、八七年にはさらにその三倍になるなど、まさに

「ブーム」に近い形となった。

ヴォギュエの成功は単にフランスのロシア熱によって説明されるものではなく、彼自身のロシア体験によって裏づけられた真摯な意見、その華麗で雄弁な語り口によるところが大きい。しかしながら成功の最大の理由は、ちょうどヨーロッパ、ことにフランスで自然主義が行き詰り、出口のない状態であったところに、キリスト教的ヒューマニズムにあふれた理想主義的文学としてトルストイを中心とするロシア文学を紹介した点にある。ヴォギュエが『ロシア小説』に付した長文の序言の大部分はロシア文学の解説ではなく、フランス自然主義文学の衰頹の原因究明であった。彼はフランス文学再生の方途として、治療薬としてロシア文学を「処方」したのである。確かにロシア文学に一貫して流れているのは、人間と人間の運命について真剣に考えるという理想主義的態度であって、ヴォギュエはまさにこの点をよく理解していた。ところで一八八〇年代は、日本で言えば明治一〇年代にあたる。ヨーロッパに大きく眼を開いていた日本は、「ヨーロッパで発見されたばかりの」みずみずしいロシア文学を貪欲にとり入れた。さらに、近代化の途上にあつた日本は、やはり十八世紀以降の近代化に伴うさまざまな苦悩をヒューマニスティックに描いたロシア文学に、他の外国文学に対する以上の共感を示したのであつた。

序 論

ロシア文学の伝統

トゥルゲーネフ、ドストエフスキイ、トルストイなどの十九世紀作家の

存在があまりにも巨大であったために、ロシア文学の歴史はせいぜいプーシキンまでさかのぼって論ぜられることが多かったが、ロシア文学はプーシキンによって十九世紀初頭に突如開花したのではなく、十世紀末にさかのぼる千年に近い歴史をもっており、ロシア文学の伝統はこの長い期間に徐々に形成されて来たのである。

ロシア文学はイギリス、フランス、ドイツの各国文学と並んでヨーロッパで最も古い文学の一つである。これらのヨーロッパ諸国の文学が誕生した中世は、世界的に見て最も普遍的な文化・文学が成立した時代であり、日本をも含め、アルメニア、グルジア、チベット、チュルク、モンゴル、タミールなどが世界文学の領域に入って来た時代であることをわれわれ極東の間人としては想起しておく必要がある。

中世においては、宗教は知的活動の出発点であり集約点の役割を果たした(ヨーロッパにおけるキリスト教、ペルシアにおけるマニ教、中国における道教など)。中でも「普遍宗教」であるキリスト教と仏教の果たした役割は大きい。東アジア諸国において仏教がインドより渡来した「異国」の宗教であったように、ヨーロッパ諸国においてもキリスト教は「東方」よりもたらされた異国の宗教であった。この普遍宗教に触れることによって、ヨーロッパ諸国もアジアの国々も新しい中世文化の世界に参入することができたのであって、ロシアもその例外ではない。ロシアのキリスト教化はまた、単にこの国の精神文化に大きな変化をもたらしただけではない。

いわゆる古代教会スラヴ語による聖書が体系的な文字文化をもたらし、このことによって文字表現、つまり文学表現が可能となったのである。

「ルーシ」と「ロシア」十一世紀から十七世紀に至るピョートル大帝以前の時代の文学は、慣例として「古代ロシア文学」と名づけられている。しかし「古代」という用語は、通例五世紀前後までを示す歴史概念と混同されやすく誤解のもととなる。この用語は Древнерусская (あるいは Древняя русская литература (Old Russian Literature) の翻訳であるが、これは「古い」ということを意味こそすれ、歴史的な「古代」の概念を示すわけではないので、たとえば Old English を「古英語」と訳す学界の慣例にならうか、別の言い回しを考えるべきであろう。

ロシア Россия という言葉が文献に現われるのは十五世紀末のことであり、国の名称としてロシアが用いられるようになったのは十八世紀からである。ピョートル大帝以前は Русь と古形が用いられていた。この中世の「ルーシ」の形容詞形である Русский (Русскій) が同時に近代の「ロシア」の形容詞形としても用いられているために、概念上の混乱が見られるが、この二つの名称は弁別して用いられねばならない。またルーシは「ロシア」の起源であるだけではなく、東スラヴに属するウクライナ、白ロシアの起源でもある。

十二世紀初頭に編纂された『過ぎし歳月の物語』に初めてルーシの名が登場するが、この年代記によると、東スラヴの地に支配者として招かれたヴァイキング（ノルマン人、ロシア語で

ヴァリヤールギ)がルーシと名づけられていたという。このルーシの語源の問題は、ロシア建国の際に異民族たるノルマン人がどのような役割を果たしたかということとかわり、またロシア人の自主性の評価の問題がここからむことになり、論争がくり返され、諸説が対立したままである。

ノルマン人の役割　ロシア建国に際してノルマン人が決定的な役割を果たしたという説は、十八世紀にロシアに招かれたドイツの歴史家G・S・バイヤー(一六九四—一七三八)、A・L・シユレーツァー(一七三五—一八〇五)によって提唱され、ノルマン説と称されている。前記の年代記には、東スラヴの諸族がたがいに争っていて正義が守られなかったので、東スラヴ人たちは「われらの地は広大で豊かであるが、そこには秩序がない。われらの上に君臨し、支配するために来たれ」とルーシ(つまりノルマン人)に向かって呼びかけ、それにこたえてリユーリックを長とするノルマン人がやって来たとある。

ノルマン説の支持者はこの記述を文字通りに受けとることから出発したが、言語学、文献学、考古学等の研究が積み重ねられるにつれて、多くの疑問が生れて来た。第一に、東スラヴの文化や経済は同時代のスカンディナヴィアよりもはるかに進んでいたという事実がある。ルーシの地の民は早くからビザンティウム、コーカサス、南方ステップの諸民族と接触し、中央アジアからビザンティウムにいたる「絹の道」シルク・ロードやスカンディナヴィアからビザンティウムにいた

る「琥珀の道」という当時の主要交易路がルーシの地を通っていたから、文化的にも経済的にも有利な条件がそろっていた。ノルマン人が来る以前に新しい政治的組織である国家を生み出すに足る社会的・経済的發展があったと今日では考えられている。従ってノルマン人がロシア建国に際し、唯一と言っていい決定的役割を果たしたと考える素朴なノルマン説は成り立たない。

しかし最初のキエフ公オレーグと次のイーゴリがそれぞれノルマン起源の名前で、ヘルギ、イングバルと対応し、ロシア語の「公」^{Князь} князь は古ゲルマンの kuning (king 英、König 独) と対応するなど、言葉の面でもノルマン人は疑いようのない跡を残している。ノルマン人の役割についての論争は歴史家の間では結着がつかないが、「ノルマン人招致」がキエフ国家の成立に大きな刺戟を与え、建国の時期を早めるように作用したということは間違いないと考えられる。

古代世界から中世世界への転換の際にゲルマン民族の果たした役割はよく知られているが、九世紀から十一世紀にかけてゲルマンの一支脈ヴァイキングが統一せるヨーロッパ中世世界の成立に大きく寄与したことは、E・R・クルツイウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』と現代ソ連の中世学者A・グレーヴィチ『中世文化のカテゴリ』によって力説されている。ヴァイキングがロシア建国のいわば強力な触媒となったという事実は、この全ヨーロッパ的視野の中で見直されれば、ショーヴィニズム的偏見によって曇らされることはないであろう。

ノルマン人の果した役割のこのような見直しは、その後のロシアの社会的文化的発展を客観的に理解するための基礎となる。というのは、アメリカと並んでヨーロッパの辺境にあるロシアはヨーロッパ人にとってはフロンティアであり、あるいは別の言い方をすれば吹きだまりであった。アメリカと同じように外国系の人々が果した役割は政治的にも文化的にも文学的にもきわめて大きいのである。

フォークロアの問題　ロシアは他のスラヴ諸国がそうであるように口承文学、民間伝承がきわめて豊富な国である。文字をもって書かれる文学の担い手がごく少数のエリートに限定されていただけでなく、中世においては文字の専門家であった聖職者が異教的色彩が強い民間伝承をけがらわしくいやしいものとして敵視したために、エリートのための記述文学(письменная литература)と国民の圧倒的な部分を占める民衆のフォークロアとの間には大きな断絶があった(口承文学をも含んだ広義⁽¹⁾の文学を、ロシア語では письменность に対して словечность と言う)。

エリートたちからは忘れ去られていたが、フォークロアを忘却から救ったのは皮肉にも十七世紀の二人のイギリス人、リチャード・ジェイムズとサミュエル・コリンズであった。十八世紀になって生歿年などまったく分らないキルシャ・ダニエロフなるコサツクによる民謡採集が行なわれるが、これはトマス・パーシーによる英国民謡の収集とほとんど同時代である。

ロシアの民衆は広々とした大地のいたるところでほとんど同じような生活を送り、キリスト

教改宗後はほとんど同じ信仰を分ちもっていた。山あり谷ありという地理的多様性、小国の分立、文化、言語の錯綜という条件下にある西欧とはまったく異なるロシアは、きわめて豊かな等質的な文化、つまり「水平文化」とでも呼ぶのがふさわしい文化を發展させて来たのであり、ヨーロッパで最も洗練された美しい口承文学を作り上げたのである。この伝統はロシア文学の民衆的性格の形成に貢献し、ことにロマン派時代以後、ロシア詩に大きな影響を与えた。

水平文化の優越は、西欧流の不安定ではあるが複雑で多層的な、高い文化、いわば「垂直文化」とも言うべき文化を作ることとを困難にしたという一面がある。ロシアの歴史が激しい断絶の連続であったことも多層的な垂直文化の成立を阻害した。文化伝承を担う少数のエリートが外国から新しい文化を学びとって来るといふ形がとられることもなる。このエリート層の中で外国人が果す役割は当然きわめて大きくなる。

ロシアとヨーロッパ　ロシアの歴史はきびしい苦難の連続であった。農耕に強く依存し、土壤の貧しい北方森林地帯から南部ステップの豊かな土地へと向うロシア人は、草原地帯を根城とする遊牧民と絶えざる戦いを繰り返した。キエフ国家の繁栄は短かく、モンゴル人による征服・支配が続き、モスクワ公国時代には西欧から切り離され、十八世紀になってやっとピョートルの強権的な近代化政策によって西欧に追いつくこととなった。この急激な改革はエリートと民衆の間の溝を一層ひろげ、社会のひずみを増すことにもなった。

政治史と文学史

ロシアでは議会のような社会的発言の場がなく、検閲によって自由な社会評論の場も限られていたから、文学が社会の唯一の「演壇」であった。だからその時々和社会的・政治的問題に敏感に対応するということがロシア文学のひとつの特徴になっている。文学は社会の鏡とされ、ロシア文学の歴史的叙述、つまり文学史叙述が、政治史に従属させられることが多い。文学に表現された思想、テーマ、つまりいわゆる「内容」だけをとり上げる場合にはこの方法だけで足りるかも知れない。

周知の通り、文化史(ことに美術史)は、政治史と対決しつつ、技術、形式、様式によって芸術・文化の発展を自律的に説明しようとする方向をとっている。文学を技巧、手法、美的形式という面でもり上げるとすれば、文学史も芸術史、文化史の一分野として様式史的な概念を導入し得る。またオスカー・ヴァルツェルが提唱した(クルツイウスは疑わしい原理である)と非難したが)「諸芸術の相互解明」(たとえば文学と美術を関連づける)も近年比較文学の立場からきわめて実証的になされている。また、特定の様式が特定のイデオロギーないし世界観と結びつくことが多いことは知られている。啓蒙思想やロマン主義がそのいい例である。

しかし文学を文学たらしめているのは第一義的にロゴスであり、言葉ロゴスによって表現される思想である。その意味で文学史は芸術史の一分野でありながら同時に精神史、思想史の基本的な資料を提供する分野であり、また思想的な立場からの文学史解釈が文学研究に大きく寄与す